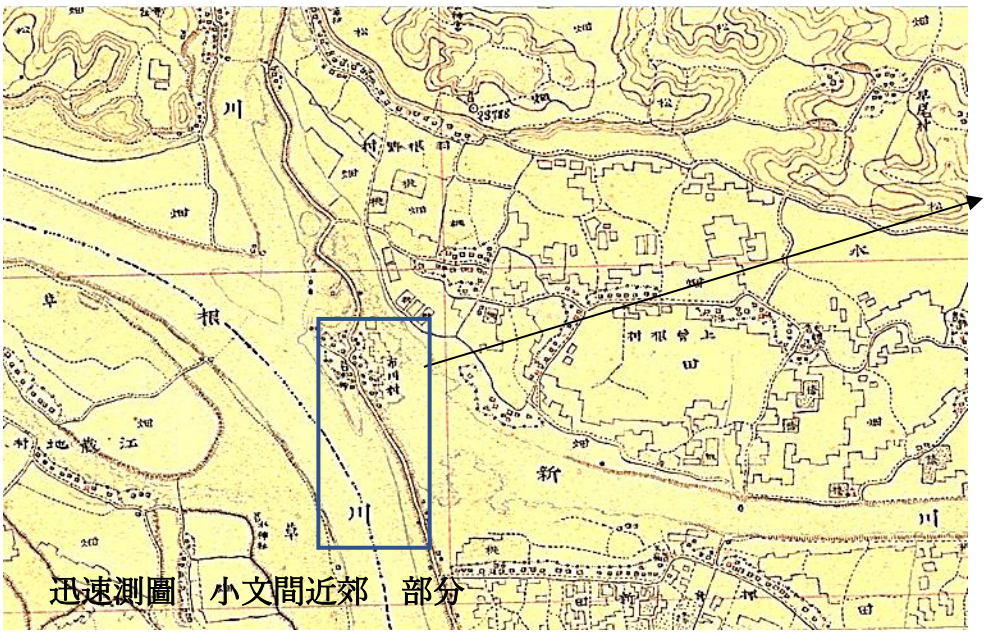
押付水神社棟札に書かれた「書巻川」を通して　　2020．12．12（土）於利文研　Ｚｏｏｍ

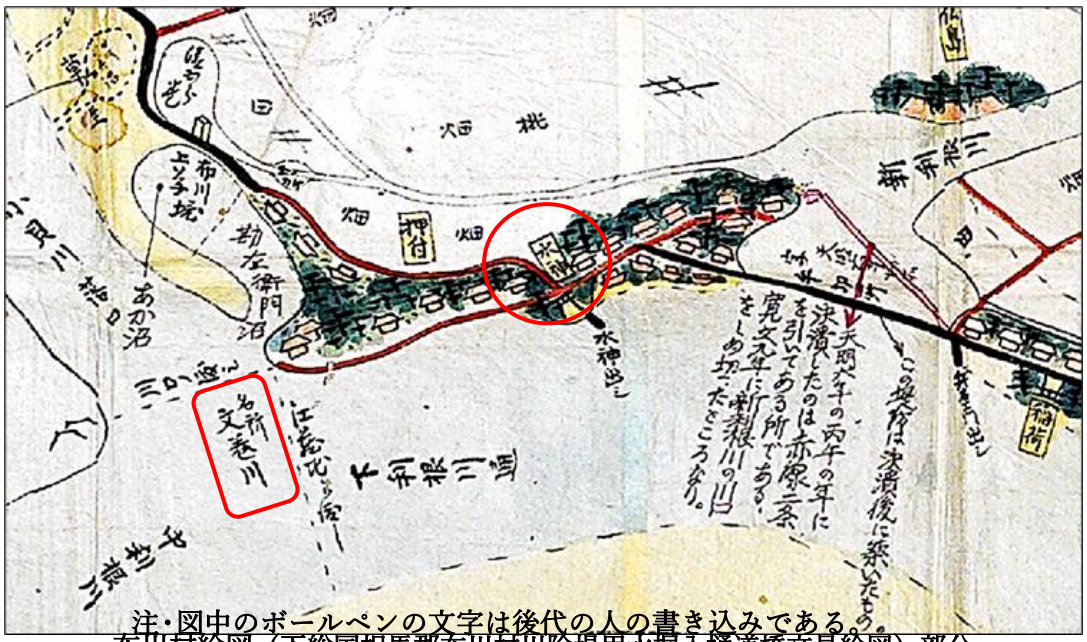
利根町　古田吉光

１、押付水神社の現在の場所　現在、高規格堤防工事で集落と共に高台に移転中

地元の人の話だと堤防工事で３回移転し、今回が４回目の移転。力石９基程あり。「野州猿田田島藤治郎　三六〆目」の銘文のある力石あり。

２、「迅速測圖」及び『布川村絵図（下総国相馬郡布川村川除堤用水掘入樋道橋文見絵図）　安政三年（１８５６）』に見る水神社の場所





注・図中のボールペンの文字は後代の人の書き込みである。

布川村絵図（下総国相馬郡布川村川除堤用水掘入樋道橋文見絵図）部分

⇧水神社の絵馬

江戸時代、押付地区は多くの高瀬船を所有。また、桃を江戸に出荷していた。押付集落北東側は水田でなく畑である。このことは微高地であることをあらわしている。

3、今回発見した棟札　　**別冊資料１　押付「水神社」棟札**

○永禄三年・・1560 年
○□・・不明
○寛政七年・・1795 年
○日幢（にちどう）・・徳満和尚

『利根町史巻五』に「由緒沿革不詳、寛政７年本殿再建の棟札有り」祭神は水波能女命

此社創立者往古布川城主豊嶋三河守領地之時永禄三年
此の所文巻川ト称シ小貝川ヨリ落合水逆流イタシ至テ難場ニテ年〃
水難破船溺死等多ク有之□付右領主為救村民之危難此神祠ヲ
鎮座在マシテ祭祀之自然以後神威赫々トシテ□今渡川之船夫
危難無之□而氏子人民太平安穏ヲ祈リ年〃正月廿日祭祀之云尓
右創立之棟札後末氏子中為心得写記之者也
寛政七年乙卯歳正月吉日　日幢

⑴解釈は以下で良いか

①この棟札は「右創立之棟札後末氏子中為心得写記之者也」とあるので、寛政７年に日幢和尚が後末の氏子等のために書いた。

②永禄３年に「小貝川ヨリ落合」の「小貝川」の名称は無かったであろう。最初の行の「此社創立者～永禄三年」と 2 行目からの「此の所文巻川～正月吉日　日幢」までは別の事柄の記載か。（あるいは日幢和尚が永禄三年には小貝川と利根川が合流していたと勘違いして書いているか。あるいは小文間北側の飯沼が増水した時、小文間と羽根野の間が窪地になっていて、常陸川に水が流れたか）

③「小貝川ヨリ落合水逆流イタシ」とあるが、どこから逆流するのか。利根川からか。

④「此の所文巻川ト称シ」の「此の所」に注目すれば、「文巻川」は河川の名称でなく川の一定の場所の名称と解釈するか。

4、「文巻川」について解説している　『利根川圖志巻二』と『利根町史巻六』

⑴『利根川圖志』巻二の「書巻川」の項

常陸ノ国より落つる蠶養（こかい）川の落口なり。（蠶養川、将門記に常陸下総両國之堺子飼之渡と見え、東國戦記には古貝川と有り）土人の説に文間（ふみま）ノ庄（立木村に文間明神あるより庄の名と為り、すべてこの邊の地を併せて文間（もんま）八千石といふ）と小文間の間にて、文間（ふみま）川といへるが誤れるなりといふ。

古歌　水莖の　かきながせども　ながれぬは　ふみまき川と　いへばなるべし

国花萬葉集巻十下総國部云、書巻川　　名所に出づ（按に名所集をいふ）景物不レ見古河ノ渡と同じ流なり。水上なり云々。これは何處なるか知り難し。猶考ふべし。　　※国花万葉記・・元禄 10[1697]

⑵利根町史巻六（太字は古田）

『利根町史巻六』に芦原修二氏が以下の様に述べている。「今の利根川が流れているところに、その当時あった川は、吉田東伍の『利根川治水論考』の付図が示すように、その水源は釈迦沼（総和町に所在した）、長井戸沼（境町に所在した）、鵠戸沼（岩井市に所在した）、菅生沼（水海道、岩井市に所在する）などの平地の沼であって比較的小さな河川であったと思われる。『利根川図志』が小貝川の落とし口だと記している**書巻川**とは、**この川が布佐台と文間台の間を通過するあたりでの呼称だったのではなかろうか**。したがってこの川は、水の豊かな季節はともかくとして、通常は鬼怒川にくらべれば一段と小さな川だったのであろう。いったん日光方面に 300 ミリを超す大雨が降れば、前項でも取り上げたように、**鬼怒川本流から渦を巻いて逆流する**ことがたびたびあったものと考える。

利根川流域で「巻き」というのは流れが激しく、船の遡行に難渋するような場所をさしている。右の事情を考えれば**「書巻川」**の名は、この逆流時のきわめてよく表しているのではないだろうか。・・・・中略・・・利根町付近では**「文巻川」**その上流では藺沼（いぬま）、さらにその上流では広川などと区々に呼ばれていたのである。（利根町史巻六・P315 から P316）

⑶　上記⑴⑵をどう読むか

⑴の「これは何處なるか知り難し。猶考ふべし」というように、『国花萬葉集』で述べているのはどこのどのような場所なのかかわからないし、「名所に出づ」なのに「景物不レ見」（見るべきような景色はない）とはどういうことなのか。赤松宗旦が記述しているように「これは何處なるか知り難し。猶考ふべし。」

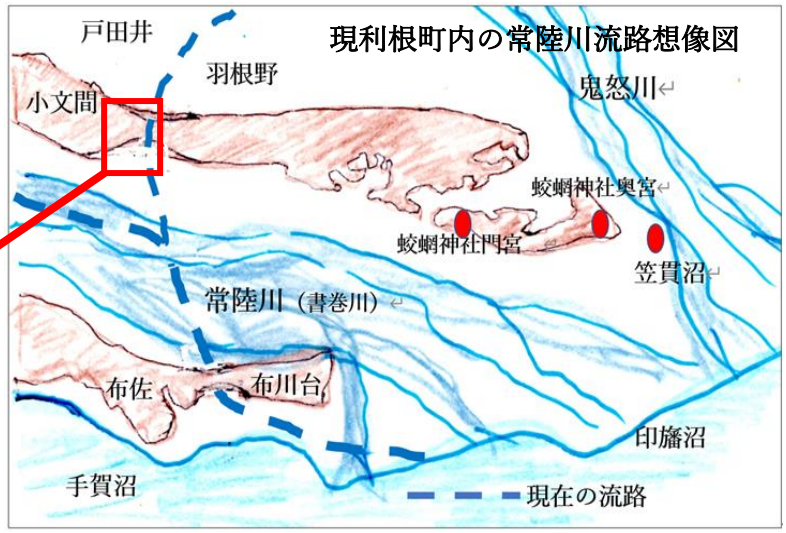
⑵の芦原氏の見解の「書巻川が布佐台と文間台の間を通過するあたりでの呼称だった」は一考の価値があるのではないか。そのことを以下で述べる。

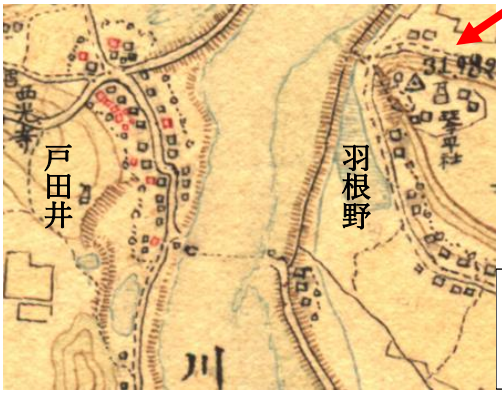
今回はここまでにします。以下は論議する価値があれば別の機会で。

5、小文間台地を開削した名残りと布川台と小文間から連なる台地の間の微高地の様子

⑴羽根野側には高さが約 31ｍの開削跡と推測できる崖があった

寛永７年（1630）に布佐、布川間の台地を掘り割って利根川を通し、小貝川を利根川に合流させるため戸田井と羽根野の間で小文間台地を開削する以前の様子を想像したのが右図である。図中の傘貫沼は、鬼怒川と常陸川が合流し出来た沼。

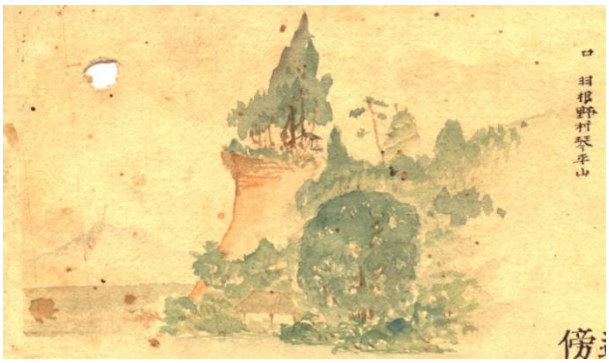




⇦戸田井と羽根野の間の小貝川開削の時出来た高さ約 31ｍの崖（迅速測図）

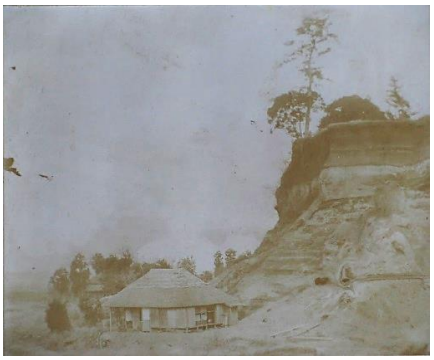
⇩寛永７年（1630）小貝川開削の名残りと思われる羽根野側開削跡の崖の絵と写真⇩

。



⇦迅速測図の羽根野琴平山

⇨文村郷土史　明治四五年撮影の羽根野琴平山



ただ、「迅速測図」の地形図から羽根野側は切り立った崖になっているから、開削したであろうことはわかるが戸田井側の川沿いの地形を見ると、羽根野側のような高い台地が無い。羽根野側より低い土地だったのであろう。そうであるならば、迅速測図別冊資料２飯沼　に見られるように、小文間の北側に広い面積を持つ「飯沼」が大雨の時は増水し、小文間と羽根野の間の谷状になった低い箇所を常陸川（書巻川）に流れ込んでいたのかもしれない。

⑵布川台と小文間から連なる台地の間の微高地（自然堤防）　別冊資料３－１・３－２の凡例参照

『延喜式』にある水神（みづち）を祭った蛟蝮神社の門宮、奥宮は小文間から連なる台地の常陸川（書巻川）に面した側に造営されている。また、古東海道が我孫子の於賦駅家を通り次の常陸国「榛谷」駅に向かうには布川から

蛟蜊神社のある場所に近い「太平船着場」(我孫子市史原始・古代・中世編 P688) に行くのが自然であると言う。

さらに、別冊資料３－１の「治水地形分類図の画像」を見ると、戦国時代末期頃人が住み着き開発されたという上曽根、下曽根、羽中をはじめ下井（元は下曽根新田）や中田切の集落は微高地（自然堤防）の上に村落を形成している。(新利根川開削の為に村潰れなった松木村、行徳村の２村はちょうど新利根川の川底辺りになる。)
このように多くの微高地（自然堤防）の散在は、小文間から連なる台地と布川台の間には、水量によって流路を変える川が流れていたことが分かる。

新利根川が開削される前から、上曽根村などの村々が目の前を流れる川を「書巻川」と呼んでいたとすれば（その文献は未発見）利根川が流れ新利根川が出来ても、慣習として押付水神社の近くをそう呼んでいてもおかしくない。

６、『利根川図志』の「舊地ハ山の西北ヲ遶るといふ」をどう理解するか別冊資料４

別冊資料５－１、５－２、５－３参照

別冊資料４で赤松宗旦が布川河岸の繁栄ぶりを述べた後に、カッコ書きのように「舊地ハ山の西北ヲ遶るといふ」という 13 文字を書いている。「山の西北ヲ遶る」「舊地」はどのあたりなのだろうか。

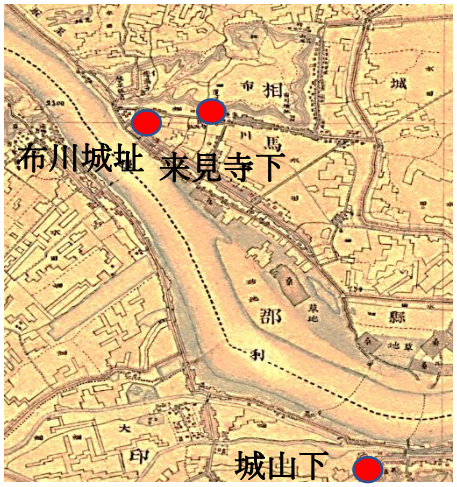
常陸川（書巻川）は布川台の北側を流れていても、戦国時代に布川津を本拠としていた新井氏は台地の北西側に居を構え回船業を営み、航行する船を監視し北条氏照や安房の里見義頼（よしのり）など有力武将と交流していたと考えてもおかしくない。既存の水路（常陸川）を使うには、布川台の南側に居を構えるより北側の方が合理的なのである。というのは来見寺のある南側に津を造ると、常陸川を通り鵠戸沼や菅生沼から来る船はわざわざ布川台の東側を回り湊に入ることになる。香取方面から来る船も津に船を停泊し、鵠戸沼方面に運航するには、わざわざ布川台の東側を回ることになり時間と労力が無駄である。

残念ながら利根川東遷以前の布川津の文献などは未発見だが、布川台地西北の低地の開発（住宅団地）は昭和４０年代後半から始められ、明治・大正時代の布川台西北は南側と異なり、少なくとも江戸時代初期の景観を保っていたと思われる。

[別冊資料５－２]は昭和３年に大日本帝国陸地測量部が測図した布川台である。布川台地の西北の地形図を見ると等高線の間隔が他の場所に比べ狭く、台地の裾近くまで水田として活用さているのが目に付く。また常陸川（書巻川）が流れていたころは、その様な場所に津が設けられたのではないか[別冊資料５－１]の「布川村絵図」を見てもその近くまで御朱印地として水田になっている。台地の側まで常陸川の流路があったのではないか。しかし、布川・布佐間が開削されると津は南側に移り、人々が移住し河岸として布川の繁栄を築いたのではないか。

また［別冊資料５－３布川城址］の切通しは、布川台の西北と南側を結ぶ軍事道路であり、人々の日常生活に使う通路のためにわざわざ開削したのではないだろうか。

７、江戸時代の布川の街は、布川・布佐を開削した土砂の上に出来た街ではないか　別冊資料６参照



⑶で述べたように江戸時代になると布川台南側に接した馬場の街より、利根川沿いに内宿・浜宿・中宿・上柳宿・下柳宿に賑やかな街が形成されていく。しかし、赤松宗旦が描いた「布川村絵図」を見ると次のような事が言えよう。布川台の接した街と利根川に沿った街の間に水田が広がり、水田の中ほどに殿堀といわれる豊田堰からの用水とは別の水路がある。しかもこの水路の部分は今でもやや周辺より低くなっている。

次に『利根川図志巻三』の「渡船場」の項（「渡船場」は書肆の名が無い初期の『利根川図志』にある）には次のような記述がある。

「昔横町ノ隅に関ありて黒川某大岡某これを守りしという。その条約は天和十年甲子（即寛永元年）正月八日布川の三右衛門（矢口氏）より木

下シの主水に贈りし書に見えたり。（その条約をここに出すべく思いたれど、蔵主甚惜みたれば寫さで己みたり）古は布川来見寺下より木下城山下に向いて渡せるなり。朝六時より暮六時を限とせり。」

布佐・布川間の台地を掘り割って利根川を通したのが寛永７年（1630）なので、天和 10 年（1624）には来見寺下と木下城山下との間は印旛や手賀の水が満ちており、普段は穏やかな湖面で「朝六時より暮六時を限とせり」と定期的に船で渡ることが出来、それを生業とする人がいたと推察してよいのではないか。

さらに[別冊資料６]国土地理院「治水地形分類図の画像・龍ヶ崎」を見てみると、利根川に沿うように布佐の街や布川の街が微高地（自然堤防）の上にあることが分かる。この景観は布川・布佐間を開削した時の土砂を多くの労力をかけて別なところに運ぶより、利根川の流れに沿って布川や布佐に運搬し堆積させていったのではないだろうか。

８、終わりに

押付水神社は永禄３年（1560）に布川城主豊嶋三河守により建立されたという事は、押付村周辺に人が住めるような微高地（自然堤防）が常陸川によって作られていたと言えるのではないか。そして、微高地（自然堤防）に定住した押付の常人たちが流路の１つを「書巻川」と呼んでも不都合はないかもしれない。

利根川東遷以前の布川台全体を見ると、台の西北の辺りは、香取方面と鵠戸沼方面を行き来する船を停泊させたりする機能を持っており、新井氏等の回船業を営む者が住居を構えていたのではないか。また、南側の来見寺には定期的に渡し舟が就航していたのではないか。布川台の西北には布川津、南には渡船場があったのだろう。そして、布川城址の切通しは西北と南の地を結ぶ軍事道路であり、生活道路ではなかったのではないだろうか。

江戸時代に反映した布川河岸や布佐河岸は、寛文９年（1669）に新利根川を塞ぎ、布川・布佐間の〆切を解き利根川を印旛方面に流した時に、〆切部分の土砂を下流の布川、布佐の川沿いに堆積させたのではないか。やがてその場所に回船業を営む新井氏や、来見寺下の渡船場が移転したのではないだろうか。

押付水神社の棟札の「文巻川」を調べているうちに、戸田井・羽根野間の開削や布川・布佐間の開削までしらべてみましが、推察が多く皆さんのご教授をいただければ幸いです。宜しくお願いします。

新利根川・布川布佐狭窄部・戸田井羽根野間掘割等

寛永７年（1630）布佐、布川間の台地を掘り割って利根川を通した。（利根町史巻六・P330 ）
　　また戸田井と羽根野の間で取手台地を開削し、押付にて小貝川を利根川に合流
寛永７年（1630）から寛永 10 年（1633）にかけ「土井大炊堤」築堤（利根町史巻六・P300 ）
寛文元年（1661）新利根川開削立案（利根町史一巻）
寛文２年（1662）上流側（押付側）から新利根川開削作業開始
　※布佐の高臺と布川の間に、堤をして川を塞ぎ（今もこの處をシメキリといふ）水を新川に入る。
　　（利根川図志巻三「新利根川」の項）
寛文６年（1666）に新利根川竣工
　※流路が直線になり、また水深が浅い為流速が速いことから水運のために使われなかっただけではなく、流域の沼地が水害を被るようになった。
寛文７年（1667）に徳川幕府の普請役伊奈忠治が中心となり、豊田堰を設け灌漑用に供した
寛文９年（1669）に押付側の分水部分を塞ぐ。布川・布佐間の〆切を解き通水。
　※赤松宗旦の描いた『布川村絵図』に「寛文中〆切跡」と記載。